

「総ぐるみ」新聞

第七回 お出かけサポーター

～三溪園～

新見 宏

11月19日の「お出かけサポーター」当日は、恒例行事を祝うかのような絶好の秋晴れでした。参加者19名の皆さんは、三溪園の紅葉に思いをはせて、バスに乗り込みました。

三溪園では、二組に分かれてガイドさんを頼み、重要文化財や古建築の多い園内を、約一時間半かけて案内してもらいました。古建築の由来や、造園に際しての原三溪の構想や気配りなどの解説に、ガイドさんの話は尽きませんでしたが、とうとう時間切れ。最後に「緑色の花」が咲くという珍しい梅林に案内され、花の咲く来春には、ぜひまた来園してくださいと、ガイドさん別れのご挨拶。

立ちっぱなしの歩きずめで、すっかりお腹もすいたので、昼食場所の「ポートヒル横浜」へ移動して、和食・洋食、それぞれ希望の食事でご満足。すぐ近くの「港が見える丘公園」のバラ苑も見頃だったので、時間がなく、上から眺めただけでした。

三溪園も山下公園も、紅葉を鑑賞するには少し早すぎたようですが、好天に恵まれて暖かく、よい一日でした。

◆原三溪と富岡製糸場

今年世界産業遺産に選ばれた富岡製糸場。ぜひ観光したい場所ですが、いかにせん遠い群馬県です。そこで、富岡製糸場ともゆかり

のある三溪園を今回の目的地に選びました。富岡製糸場と三溪園の関係を述べてみます。

幕末に開国した日本は、諸外国と貿易を始めました。当時最大のわが国の輸出品は生糸で、輸出総額の80%を占める状況で、養蚕・生糸製糸はまさに日本の基幹産業でした。

明治政府は、産業の発展・科学技術の近代化を目指し、官営の富岡製糸場を創業しましたが、その後、所期の目的が果たせたとして、三井財閥に払い下げました。

一方、横浜の生糸商・原家の家業を継いだ原富太郎（茶人であり、号は三溪）は、個人商店を会社組織に切り替える等の経営の近代化に努め、拡大する生糸貿易の波に乗って実業家として大成功、資産を築きました。明治35年、富岡製糸場を三井家から買収して製糸業にも進出。製糸の生産技術革新や、養蚕業の改革などに成果を上げました。昭和14年、原三溪は享年72歳で逝去。その後、富岡製糸場を含めた製糸業は、当時日本最大の製糸会社であった片倉工業に譲渡されました。

◆原三溪の「三溪園」にかける想い

富岡製糸場を買収した同じ明治35年、原三溪は所有地だった本牧の三の谷に自宅を新築、ここを拠点に造園を開始し、3年後に三溪園として無料で一般に公開しています。い

わゆる外苑部の一帯です。彼はなぜこのような庭園を造ったのでしょうか。

明治時代の日本は、西欧諸国に追いつけと富国強兵の道にまい進し、輝かしい成果を上げました。しかし反面、幕末から打ち続く西洋化の荒波と強烈な廃仏毀釈運動にさらされ、浮世絵や襖絵などの日本画、仏像や仏塔など日本固有の美術品の価値は評価されなくなり、破却されるか、一束三文で西欧人に売却されて国外に流出するなど、悲惨な状況となりました。



こうした世の風潮を憂いて、日本の伝統的な美を再認識し、これを守る運動を展開し、東洋の美の素晴らしさを世界に発信する活動を活発に行ったのが、岡倉天心です。

原三溪は、岡倉天心との知遇を得て、彼の思想に心酔して交友を深めました。やがて三溪は日本の伝統的美を後世に伝えようと心に決め、岡倉天心らの助言も得て、手を打たねば朽ち果てる運命にあった古建築や廃寺の仏像・仏塔などを三溪園に移築・修復し、いわゆる三溪園の内苑部を造園しました。さらには、当時食うや食わずで、天心の指導の下で日本画の改革に挑んでいた画学生の横山大観、下村観山、菱田春草らを、三溪園内の自宅に住まわせて、画業に専念できるように支援しました。

◆関東大震災と原三溪

大正12年の関東大震災では、横浜の中心市街も壊滅する大惨事になりました。その頃、横浜銀行頭取に就任していた原三溪は、横浜復興会の会長に就いて、私財も投じて横浜復興に尽力しました。震災の瓦礫を埋め立てて造成された山下公園なども、三溪の遺産でしょう。しかしこれを機に、三溪園への古建築の移築や画学生への支援はきつぱりやめて、復活することはありませんでした。

原三溪は、横浜の復興事業に心血を注ぎ、私財を消尽したと伝えられています。

◆三溪園の現在

戦後の昭和28年、三溪園は原家から横浜市に譲渡され、大震災や空襲で被災を受けた部分の修復が行われ、昭和29年に外苑部が公開されました。その後も横浜市は復旧工事を進め、昭和33年、内苑部が初めて一般に公開

され、さらに横浜市は、新たな古建築の移築も計画的に始めています。

平成元年、園内に三溪記念館が完成。平成12年には、原三溪の旧宅「鶴翔閣」をほとんど新築同様に復元して公開し、今は結婚式場にも利用され、新婚さんが園内で記念写真を撮る風景が見られるようになりました。

◇三溪園のお出かけサポート

長谷川 千鶴

三溪園は、横浜の実業家、原富太郎(三溪)が、約5万3千坪の土地に、関西や鎌倉などから17棟の歴史的建造物を移築して、自然と見事に調和して造り上げた日本庭園です。外苑には三重塔、合掌造り住宅、三溪記念館等があり、内苑は原家が私庭として使ったエリアです。三溪の死後、昭和28年に原家から横浜市に譲渡されて、財団法人三溪園保護会の管理となり、平成19年には国の指定名勝となりました。関東大震災や戦災の被害を受けたものの、復興工事が終了して、三溪さんはほっとしていることでしょう。

原三溪の卓越した芸術の見識と、文化遺産への深い造詣をもって、日本の美の世界を実現したといえる三溪園、四季折々に、盆栽展、観梅会、観桜会、句会、茶会、ホテルの夕べ、菊花展等が催されているとのことです。

◇初めての「お出かけサポート」

中尾 長衛

自分が果たして人様をサポートできるのかと自問自答すると、何もできないよと不安がよぎりましたが、11月18日の三溪園他のお出かけサポート」に初参加しました。

事務所前からマイクロボスの最後部に乗車、車椅子2台を積んで出発となりましたが、

車内は、気分が高揚した皆さんの会話が弾んでいます。

三溪園に到着後は、参加者19名が2組に分かれ、ガイドさんによる説明を受けながら内苑から外苑の順に回りました。私の組は、全員サポートが不要な方々と見受けました。まず、原三溪の生い立ちから、当地に三溪園を完成させるまでの経緯に始まり、各建物や庭園、園内の四季折々の季節感等、詳細な説明を受けました。何度も訪れている三溪園の魅力も、再認識できた1時間半の散策でした。港の見える丘公園に移動して昼食を摂り、日限山に帰ってきましたが、カメラを持参したので写真数枚を撮ったものの、何のサポートもできなかったという反省が残りました。

～介護の現場から～ こんな送迎をしています

朝8時、事務所前からヘルパー2人組が介護車で出発します。行き先は透析を受ける人の家、介助しつつ車に乗っていただき、人工透析を受けるクリニックへ移送。介助しながら車から事故なく降りていただき、ヘルパーが付き添うか、または車椅子に乗っていただき、院内を移動して、着替えの介助、血圧測定や体重測定を手伝い、ベッドメイキングをして横になっていただき、約4時間かかる透析を受ける態勢にして、ヘルパーの1回目の仕事を終えて事務所に帰ります。

透析が終わりそうな時間を見計らい、お迎えに行きます。日によって早く終わる事も遅くなることもあります。透析が終わるのを待合室で待ち、着替えを手伝ったり、食事室に連れて行ったりして、帰り支度ができると車に乗せて自宅までお送りし、自室の安全な場所まで介助をして連れて行き、2回目の仕事は終わりになります。事務所に帰って介護記録を書き、今日の介護の様子を報告します。これで、人工透析を受けている人の今日の介護が終わりになります。(一柳 朗)